

東日本大震災の災害地理 (2)

——遠野ユニオンボラセンの空間分析——

一橋大学院 岩舘豊

1 目的と方法

2011年4月18日、岩手県遠野市の地区公民館において、大船渡市など三陸沿岸部の被災地へ救援・支援に向かう災害ボランティアを支援するための活動拠点が形成された。この災害ボランティアを「後方支援」するための空間は、岩手県内陸部の北上市に拠点を置く個人加盟型労働組合であり、また「遠野まごころネット」の参加団体でもある共生ユニオンいわてが設立したものであり、「共生ユニオンいわて・遠野ボランティアセンター」（以下、遠野ユニオンボラセンと表記）と名づけられた。2011年4月18日から10月末および2012年5月26日から8月11日にかけて、東京や大阪、京都など都市部からの来訪者を中心に、延べ740余名のボランティアがこの空間を訪れ、食事・寝具・ボランティア作業用具の貸与・提供を受け、被災地へと向かっていった。本報告の目的は、この遠野ユニオンボラセンの空間分析から、災害過程における支援活動の動態の一端を明らかにすることにある。

報告者は、一橋大学「社会と基盤」研究会岩手調査班の一員として、2011年11月から断続的に大船渡市など三陸沿岸部、遠野市、北上市での現地調査を実施し、(1) 遠野ユニオンボラセンのスタッフへのインタビュー、(2) 遠野ユニオンボラセンでの参与観察、(3) 共生ユニオンいわてにかんする資料調査に従事してきた。また、仙台や東京において、共生ユニオンいわての協力団体スタッフおよび遠野ユニオンボラセンを経由して被災地支援に向かった若年非正規労働者へのインタビューを実施した。本報告では、これらのフィールドデータにもとづいて、遠野ユニオンボラセンという空間の生成・展開の過程を記述するとともに、「後方支援」の空間で交差した行為者の経験の内実へと接近を試みる。

2 結果と結論

これまでのフィールドワークから明らかになったことのうち、重要な点は以下の点である。第1に、遠野ユニオンボラセン空間が現出する構造的背景として、北上などの岩手県内陸部における産業基盤・インフラ整備、工業団地を中心とする産業集積、中心市街地の空洞化といった空間構造の再編成があった。こうした背景のもと、北上の青年会組織を足場として労働・社会問題に取り組む北上合同労組が、1985年に共生ユニオンいわての前身として形成された。第2に、中心市街地の空洞化に取り組むなかで、共生ユニオンいわての中心メンバーが「街づくり市民の会」を組織し、その過程で蓄積された人的・物的資源が遠野ユニオンボラセンの設立・運営の基盤となった。第3に、ボランティアの「後方支援」という論理は、ボランティア自己完結論への違和・対立という思想的契機を含むと同時に、相対的に資源の乏しい都市部若年非正規労働者による支援活動を可能にするものであった。そして第4に、遠野ユニオンボラセンという空間を経由した支援活動の経験は、都市部若年非正規労働者にとって、「都市でも被災地でも困った時には助け合う」という点において「労働組合もボランティアも変わらない」という認識回路形成を促すものであった。

災害過程における遠野ユニオンボラセンという空間は、それまでの構造・主体的諸条件に大きく規定されながら、他の空間や空間内部において緊張・差異・矛盾をもちつつ現出する。だが、いったん現出した空間それ自体が物的基盤として作動し、支援活動をめぐる特定の論理への違和・対立的契機の具現化ともなり、それまで行為主体が属していた生活圏を越えて現象・問題を把握する認識回路形成の装置としても作用する。こうした災害過程における支援活動の拠点形成がもつダイナミックなプロセスの一端が明らかとなった。